

2010 ワールドカップ南アフリカ大会のゲーム分析

—有効攻撃から見る日本代表とベスト4の差異—

The game analysis of 2010 FIFA World Cup South Africa

-Difference between Japan national team and the best four teams in the World Cup finals in effective attacks -

1K08A188-6 藤田孝輔

指導教員 主査 堀野博幸先生 副査 石井昌幸先生

【緒言】

岡田武史氏が監督として率いた日本代表は2010年の南アフリカワールドカップにおいて、2002年日韓ワールドカップ時と並び日本代表史上最高成績となるベスト16進出を達成したが、日本代表が結果とともに実のある内容で勝利を勝ち取ったのかという点、決してそうではない。そこで、本研究では日本代表がどの程度有効な攻撃を行う事が出来たのか、そして今大会でベスト4に進出したチームとどのような差がみられるかを、ゲーム分析を用いて検討する事を目的とした。

【方法】

1. 分析対象

2010年に開催されたワールドカップ南アフリカ大会の全64試合において生まれた、有効と思われる攻撃の全ての場면을対象とした。

2. 分析

南アフリカにて行われた上記64試合のテレビ放送されたアナログ映像を録画し、それらの映像をゲーム分析ソフト DART FISH Team Pro (ダートフィッシュ・ジャパン) を用いて有効攻撃と判定出来るものを選別し、分析項目のタグ付けを行った。

3. 有効攻撃について

各チームの攻撃シーンの中から、「シュートまで至った攻撃」と「シュートには至らなかったが、あとワンプレーでシュートやゴールに直結する攻撃」を選出し、これらを有効攻撃と呼ぶことにした。また、サッカー有識者10名(うち有コーチ資格者5名)で選出した各シーンの精査を行い、その後さらに有識者3名(うち有コーチ資格者2名)による再精査を行い、有効攻撃であるかどうかの判定の精度を高める事を狙いとした。

4. 分析項目

有効攻撃にかかわる、ボール奪取からシュートもしくは相手ゴール前までボールを運ぶ過程の要素として、以下の15個の項目を設定し、分析を行った。

【結果】

日本代表とベスト4進出チームの有効攻撃のパターンでは、明らかな差がみられた。日本代表はセットプレーとセンタリングによる攻撃から多くチャンスを作り出している事から、サイドからの攻撃を重視している事やセットプレーを有効活用している事が考えられる。それに対し、ベスト4進出チームは平均してどの攻撃パターンからでもチャンスを作り出しており、対戦相手の守備戦術に応じて様々な角度から相手を崩せる手段を持ち合わせていると言える。今大会全体の平均攻撃時間は16秒で、その中で日本代表はセットプレーを含む数とそうでない数の平均値に4秒以上もの大きな差がみられた。この事から、日本代表がいかに他国よりもセットプレーでの有効攻撃を生み出しているかが分かる。

【考察】

本研究では、有効攻撃という定義から日本代表の今大会における攻守両面の特長とポイントを明らかにする事を試みた。データからみてきた事は、攻撃においてはサイドからの攻撃とセットプレーを軸とし、セットプレーはとりわけ有効な攻撃の手段として重要であり、守備においては逆に対戦相手も同様の攻撃パターンを使い、また守備的な戦い方を強調された割には対戦相手に少ない時間と手数で攻撃された傾向にあった。これからは、攻撃面はセットプレーを最大限の強みとして理解し、守備面はボール保持の仕方に気を配る事、そしてセットプレーを簡単に相手に与えない事が必要である。

今後、守備戦術の更なる発達が見込まれるのでレスタイム、レススペースの傾向はより顕著になっていく可能性が高い。そこで、ボールをプレッシャーのない中で扱う事の出来るセットプレーは有用性と価値をより一層増していくであろう。それを最大の武器に出来る可能性のある日本代表は、2050年までにW杯優勝を達成出来る公算は十分あると考えられる。